日本女性詩集

1930年～1943年

編集復刻版　全2巻・付録1・別冊1

昭和戦前・戦中期に刊行された「女性詩集」、関連雑誌を収録。当時の女性詩を俯瞰するための重要資料として復刻刊行！

A4判（第1・2巻、四面付）・A5判（付録1）・上製
総1、162頁（原本総2、728頁）
解　説＝澤　正宏（福島大学名誉教授）
揃定価＝本体70、000円＋税
刊　行＝2014年7月

不二出版

日本女性詩集　1930年～1943年【編集復刻版】全2巻・付録1・別冊1

◉体　裁――A4判（第1・2巻、四面付）・A5判（付録1）
上製、総1、162頁（原本総2、728頁）

◉別　冊――解説・総目次・索引
別冊のみ分売可＝本体1、000円＋税

ISBN978-4-8350-7694-2

◉解　説――澤　正宏（福島大学名誉教授）

◉推　薦――宮崎真素美（愛知県立大学教授）

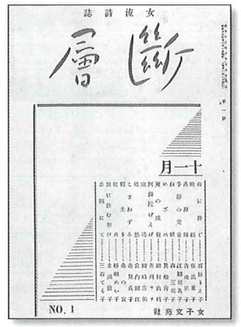
◉揃定価――本体70、000円＋税

ISBN978-4-8350-7689-8

◉刊　行――2014年7月

◉収録資料一覧

収録巻	書名	編者	発行所	刊行年月
第1巻	現代新選　女流詩歌集	西村久一郎	太白社	1930年6月
	日本女性詩人集	井上淑子	詩集社	1930年7月
	女学生詩集　順送球	西原茂	第一書房	1939年3月
	現代女流詩人集	永田助太郎・山田岩三郎	山雅房	1940年11月
	詩集　母の詩	全日本女詩人協会	書物展望社	1941年11月
	日本少女詩集	野長瀬正夫	洛陽書院	1942年9月
	新女性詩集	深尾須磨子	鶴書房	1942年12月
第2巻	詩集　海の詩	日本女詩人協会	書物展望社	1943年5月
	『地上楽園』第3巻第11号	白鳥省吾	大地舎	1928年11月
付録	『詩神』第6巻第1号「現代日本女性詩人研究号」	田中清一	詩神社	1930年1月
	『詩神』第6巻第5号（抄録）	田中清一	詩神社	1930年5月
	『詩人時代』第1巻第3号「現代女流詩人号」	吉野信夫	詩人時代社	1931年7月
	『女性詩歌』創刊号	吉野信夫	現代書房	1933年10月
	『詩人時代』第4巻第10号「現代女流詩人号」	吉野信夫	現代書房	1934年10月
	『女流詩誌　断層』第1号	谷忠夫	女子文苑社	1938年11月
	『女流詩誌　断層』第19号	谷忠夫	女子文苑社	1940年4月
別冊	解説・総目次・索引			



不二出版
〒113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシミリ03-3812-4464
振替00160-2-94084

●表示価格はすべて税別。

2014/6

復刻の辞

当資料集は、昭和戦前・戦中期に女性の作品のみを集めた詩集、及び関連する雑誌群を収録した。『現代新選 女流詩歌集』『女性詩歌』には短歌も収録されている。

『詩人時代』第四巻第一〇号「現代女流詩人号」（一九三四年一〇月）で河井酔茗が「つまり女性の詩を見渡した処で此人は確かに伸びる、此人の目標は正しいと思へるやうな女流詩人を殆ど見出し得ないのである」、また高群逸枝が「女流詩人といへば振はぬものと批評してかゝるのがきまりのやうになつてゐる」とそれぞれ述べているように、女性詩人に対する評価は低かった。そのためか、「女性詩集」は昭和初期にあまり作られていない。

しかし、満洲事変がおきた一九三一年から戦時色が加速するにつれて女性の戦争協力体制が強化され、そして人口増加政策が図られると女性詩は「母性の文学」として隆盛をみせるようになっていた。一九四一年、深尾須磨子を代表に二四名の女性詩人たちは全日本女詩人協会を設立し、詩集『母の詩』『海の詩』を刊行し戦争詩をうたった。

また「銃後のつとめ」として「少女」の詩集も刊行された。『日本少女詩集』の「後記」では、「執筆者は十六、七歳から二十歳前後の少女で、（中略）いづれも銃後の生産に従事し、或ひは父兄の留守をまもつて、一家の支へとなつてゐる勤勉な少女達である。」とある。

本書は、当時の女性詩人がおかれた状況を俯瞰することができ、また戦時体制にどう組み込まれていったのかを窺える、近現代文学史・女性史研究のための貴重資料として復刻刊行するものである。

――不二出版

主要執筆者一覧

生田花世　井上淑子　上田静栄　江間章子　大井さち子　大崎安芸子　大野良子　岡村須磨子　岡本咲子　加藤寿美子
川路せい子　菊池美和子　菊池ゆき　窪川稲子　後藤郁子　後藤八重子　坂本茂子　澤ゆき　澤木隆子　鈴木初江
鈴木葉子　高橋たか子　高群逸枝　竹内てるよ　竹島きみ子　館美保子　壺田花子　露木陽子　友谷静栄　永瀬清子
中田信子　中西不二子　中村千尾　英美子　林芙美子　深尾須磨子　碧静江　方等みゆき　町田志津子　町田トシ子
松村敏子　馬淵美意子　目次緋紗子　森美千代　山口宇多子　山本華子　与謝野晶子　米澤順子　渡辺衣子

推薦文

「女性」の変容

宮崎真素美（愛知県立大学教授）

伸びやかで才気あふれる女性詩人たちが、十余年のあいだに、その才能を「銃後の女性像」へと収斂させてゆくさまがわかる。

第一巻の四冊は、読売新聞のバックアップを受けた『現代詩選 女流詩歌集』（昭5）にはじまり、与謝野晶子の詩篇を巻頭に置く『日本女性詩人集』（昭5）、そして、大連弥生高等女学校の女生徒たちによる明朗でモダンな詩篇で構成した『女学生詩集 順送球』（昭14）、さらに、収録詩人たちのプロフィールやポートレートを添えた『現代女流詩人集』（昭15）。あいだに満州事変や日中戦争を挟み、その影を宿しながらも、生命の太さや逞しさ、それを支えるエロス、労働者の生きざまを照らすプロレタリア的手法、モダンガールの感覚が冴えるモダニズム詩など、一様でない手法と視点とが伝統的なうたいぶりと新風とを織り交ぜて自由に拡げられている。

対する第二巻の四冊は、日米開戦を間近に結成された「全日本女詩人協会」による『母の詩』（昭16）、『海の詩』（昭18）、同会メンバーによる『新女性詩集』（昭17）、そして、勤労奉仕をする少女たちによる『日本少女詩集』（昭17）。詩人たちは、「母」「妻」「寡婦」「娘」としての役割を担ってうたい、造型された「女性」性の強調は、第一巻収録詩集との皮肉な対比をかもし出している。

内地に加え、朝鮮・台湾・満州・北支に住む少女たちの、内省と決意に満ちた『日本少女詩集』は、三年前の、大連の女学生たちによる『女学生詩集 順送球』のうたいぶりと、何と対照的なことか。八冊の詩集のさまざまな表情を、時代のなかで見てほしい。

内容見本

◀『日本女性詩人集』

序

日本に於ける女性詩人の詩華集が、いまだ刊行されぬのを遺憾として、先輩諸姉のお力を借りてこの集を編みました。

私たちはこの集のために、あらゆる愛と熱とを注ぎましたが、微力の致すところ、なほ不満足の點が多々あることゝ思ひます。然し、後日、識者の手によつて萬全をつくした大集の成ることを期待し、その日のために、又、女性詩人の詩の進展のために、この集が何分か寄與するところあれば、望外の喜びと思ひます。

この企てのために、與謝野晶子氏、深尾須磨子氏、生田花世氏を初め先輩諸姉が、快く玉稿をお送り下すつたことを、嬉しくお禮申あげます。

尚、作品の配列は確然とした根底があるわけではありませんが、詩人の歴史的順位をもつて編みました。

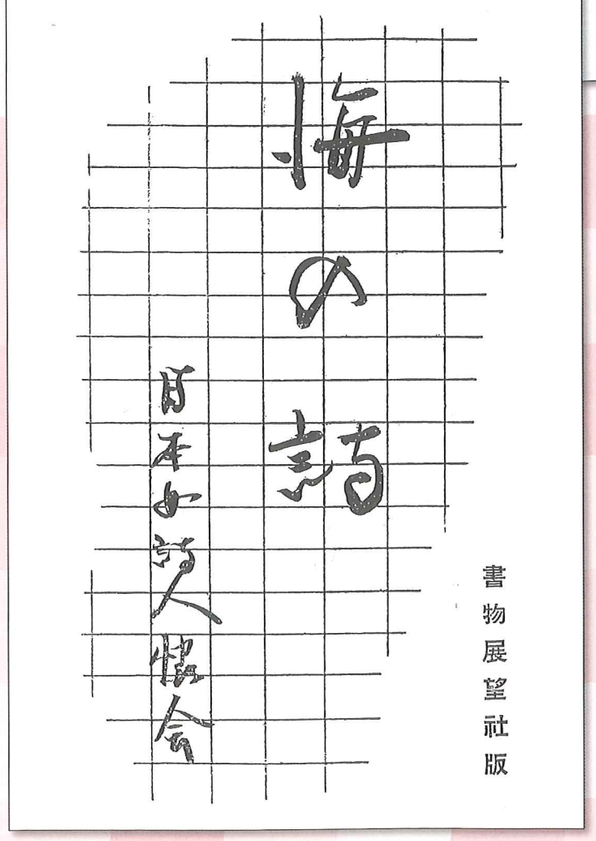
一九三〇年、六月十六日

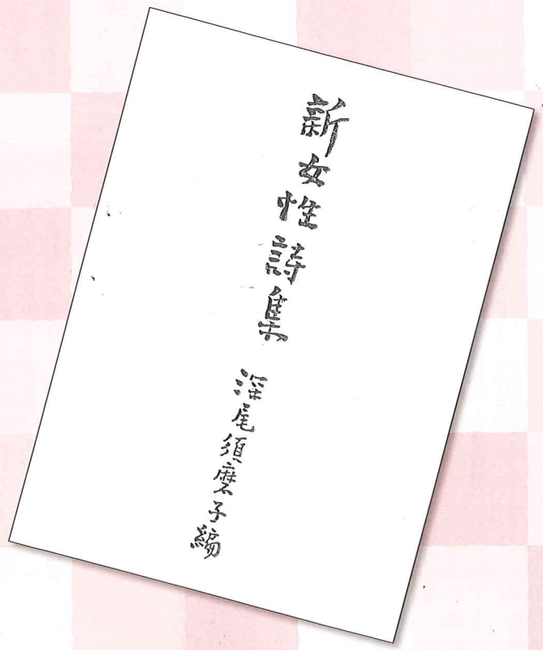
野方にて　井上淑子

◀『現代新選　女流詩歌集』

目次

歌
萩散る頃……今井邦子（四）
時々の歌……生田花世（六）
親を懐ふ……乾千鶴子（一〇）
偶感……池田靜代（一二）
病める子に付添ひて……池山薫子（一四）
ひたすらに歌ふ……原阿佐緒（一六）
ふとよんだ歌……長谷川時雨（一五）
常磐木の花……羽田野繁子（一七）
秋の薔薇……羽田かの子（一九）





内容見本

朝の言葉　深尾須磨子

大光體が發射する
灼熱の白熱の
傳令！

そら歴史が滅びるぞ
城が壊れるぞ
阿片の山が燃えるぞ

そら玉子が生れるぞ
バンが焦げるぞ
硝子の家が出來上るぞ

さ、ん、ら、ん！
槌を打ち下ろす若者の
地球はその姿勢です

迎一九三〇年
――全女性よ今年をこそ期さう――
待ちに待つた麒麟の子が

生れるといふあしたです
おばあさん腰をのばしなさい
おかあさん頭を上げなさい
みいちやんも正ちやんも踊りなさい
赤坊も手を叩きなさい
ましろな馬が
天かけると云ふあしたです

斷面　後藤郁子

じりじりと肉薄してゆく白蟻は已に急所へ喰ひこんだのだ。

街を叩けばコボコボ空筒の音がする
ドン底の不景氣
一〇年來……二〇年來……
まるで、そんな週期的なものぢやない

関連図書

文藝　全60巻・別冊1

改造社　発行（昭和8年～昭和19年刊）

『文藝』は、満洲事変を境に思想弾圧が強化されプロレタリア文学が壊滅するなか、新たな文芸復興の機運を背景として、『文學界』にひと月遅れて創刊され、『新潮』とならぶ昭和一〇年代の代表的文芸雑誌となった。創作、評論を中心とし、海外文学も積極的に紹介したが、太平洋戦争開戦後の文芸雑誌に対する一層の監視下、戦時色が際立つ誌面となり、一九四四年軍部の圧力により廃刊に至った。昭和戦前・戦中期の文壇状況を研究する上で必須の文芸雑誌である。

別　冊＝解説（山下真史）・総目次・索引
A5判・上製・総約32、000頁
推　薦＝安藤　宏・太田哲男・川津　誠・木村一信
揃定価＝本体956、000円＋税

第1回配本（第1～5巻）　本体54、000円＋税
第2回配本（第6～10巻）　本体82、000円＋税
第3回配本（第11～15巻）　本体82、000円＋税
第4回配本（第16～20巻）　本体82、000円＋税
第5回配本（第21～25巻）　本体82、000円＋税
第6回配本（第26～30巻）　本体82、000円＋税
第7回配本（第31～35巻）　本体82、000円＋税
第8回配本（第36～40巻）　本体82、000円＋税
第9回配本（第41～45巻）　本体82、000円＋税
第10回配本（第46～50巻）　本体82、000円＋税
第11回配本（第51～55巻）　本体82、000円＋税
第12回配本（第56～60巻＋別冊）　本体82、000円＋税

現代日本詩集　1927年～1944年　全5巻・別冊1

昭和戦前・戦中期にかけて、その年に活躍した詩人とその作品を紹介する「年鑑詩集」がほぼ毎年刊行されていた。有名無名を問わず多くの詩人を紹介するこの詩集は、まさに当時の「詩壇の縮図」ともいうべきものである。本資料集成には、一九二七年から一九四四年にかけて刊行された「年鑑詩集」二二点が収録され、総一、一〇〇名にも及ぶ詩人のデータ、また三、八〇〇の作品が含まれている。昭和戦前・戦中期における「現代詩アンソロジー」の集大成。

別　冊＝解説（澤　正宏）・執筆者索引
A4判・上製・総1、770頁
推　薦＝阿毛久芳・佐々木幹郎
揃定価＝本体125、000円＋税

文學界　全42巻・別冊1

文藝春秋社　発行（昭和11年～昭和19年刊）

本誌は昭和八年に創刊された文芸雑誌の雄である。

創刊当時の編集同人は武田麟太郎、林房雄、小林秀雄、川端康成、深田久弥、広津和郎、宇野浩二の七名。創刊以来、個人主義と芸術主義を積極的に主張する立場を明確に掲げ、昭和一〇年代文学に主導的な、極めて大きな役割をはたした。弊社では、未復刻であった三巻七号から戦前の終刊号となる一一巻四号までを復刻し、文学空間を埋め江湖に供する次第である。

別　冊＝解説（樫原　修・田中励儀）・総目次・索引
A5判・上製・総21、852頁
推　薦＝池内輝雄・栗原　敦・紅野敏郎・長谷川啓
揃定価＝本体630、000円＋税

第1回配本（第1～6巻）　本体90、000円＋税
第2回配本（第7～12巻＋別冊）　本体90、000円＋税
第3回配本（第13～18巻）　本体90、000円＋税
第4回配本（第19～24巻）　本体90、000円＋税
第5回配本（第25～30巻）　本体90、000円＋税
第6回配本（第31～36巻）　本体90、000円＋税
第7回配本（第37～42巻）　本体90、000円＋税

婦人文芸　全10巻・別冊1

神近市子　主宰（昭和9年～昭和12年刊）

女性文芸雑誌『女人芸術』『火の鳥』が相次いで終刊になった昭和一〇年代、女性の表現の場として求められたのが本誌である。

主宰者の神近市子がジャーナリスト・翻訳家・評論家として優れた女性解放思想家・実践者であっただけに、本誌は単なる文芸雑誌に終わらず、フェミニズムをはっきりと意識した雑誌となっている。女性史・昭和文学研究に新しい示唆を与えるものとして全三七号を復刻する。

別　冊＝解説（黒澤亜里子）・総目次・索引
菊判・上製・函入・総6、362頁
推　薦＝佐多稲子・田中和子・渡辺澄子
揃定価＝本体150、000円＋税

文芸懇話会　全2巻・別冊1

文芸懇話会　刊（昭和11年～昭和12年刊）

本誌は、文壇・文学者のファシズム統合への道を拓いた官民合同の文学団体、文芸懇話会の機関誌である。同会は一九三四年三月、内務省警保局長の松本学が文化統制を目的に直木三十五らファッショ作家を抱え込んで創立、大衆文学・自由主義までの多くの作家を取り込むことに成功した。編集は交代制で、川端康成・菊池寛・室生犀星・吉川英治・徳田秋声・島崎藤村・佐藤春夫ら。国家の文化政策とそれに対峙する文学者とのせめぎ合いを明らかにする。

別　冊＝解説（高橋新太郎）・総目次・索引
A5判・上製・総1、516頁
推　薦＝海野福寿・榎本隆司
揃定価＝本体53、000円＋税

ゲエ・ギムギガム・プルルル・ギムゲム　全10冊・別冊1

エポック社　発行（大正13年～大正15年刊）

築地小劇場が開場した一九二四年六月、野川隆、橋本健吉（北園克衛）、玉村善之助ら若き詩人たちが「既成文壇への挑戦」を掲げて、様々な「言語実験」をちりばめた詩雑誌を創刊した。震災後の状況を背景に出現した詩誌であり、日本のダダイズム詩が最もピークに達した時に創刊され、日本のシュールレアリスム詩がスタートしようとした年に終刊したことの意味は大きくて深い。

別　冊＝解説（梅宮弘光・五十殿利治・澤　正宏・西田　勝）・総目次・索引
B5判変形・並製・函入・総258頁
推　薦＝五十殿利治・澤　正宏
揃定価＝本体30、000円＋税

叢書『青鞜』の女たち　全20巻（総21冊）

本叢書は、雑誌『青鞜』の同人たち及びその周辺で活躍した女性たちを選び、その代表的著書20点を集め、解説を付して復刻したものである。

収録人物＝平塚らいてう、伊藤野枝、与謝野晶子、岩野清、生田花世、荒木郁、神近市子、長谷川時雨、水野仙子、山川菊栄、上野葉子、山田わか、田村俊子、木村駒子、西川文子、中平文子、松井須磨子、三宅やす子、鷹野つぎ
函入・総7、720頁
推　薦＝瀬戸内寂聴・羽田澄子・米田佐代子
揃定価＝本体150、000円＋税